

Title	過剰適応と集団アイデンティティとの関連
Author(s)	尾関, 美喜
Citation	対人社会心理学研究. 2011, 11, p. 65-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12316
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

過剰適応と集団アイデンティティとの関連

尾関美喜(金沢大学大学教育開発・支援センター)

過剰適応は、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、自己抑制と自己不全から成る内的側面と、他者配慮、期待に沿う努力、人から良く思われたい欲求から成る外的側面から構成される。本研究では、過剰適応の外的側面を所属集団への適応方略としてとらえ、内的側面の高さに応じて 1) 外的側面が集団アイデンティティに及ぼす影響の違い 2) 集団アイデンティティが自尊心に及ぼす影響の違いがみられるかを検討した。質問紙調査を大学生と短大を対象に実施し 345 名の回答を、多母集団同時分析によるパス解析で分析した結果、外的側面から集団アイデンティティを経て自尊心に至る過程は、内的側面の高さにかかわらず認められたが、内的側面の高さに起因するパス係数の差はみられなかった。

キーワード: 集団アイデンティティ、過剰適応、自尊心

問題と目的

過剰適応とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うことである(石津・安保, 2008)。過剰適応の定義から、過剰適応している者は周囲の要求や期待に応えているか、少なくとも応えようとする努力を行っているように見えるだろう。そのため、社会適応の点では問題が見当たらないかもしれない。現に学校現場では、過剰適応は「良い子」と同義に扱われているが、臨床的な観点からは、過剰適応は自己を抑圧するという点で不適応なものとしてとらえられている(桑山, 2003)。しかし、外的な期待や要求に応える行動は、社会適応にはある程度必要不可欠である。自己への評価懸念から外的な期待や要求に応えるだけの努力を行ったとしても、その結果として所属集団に適応し、少なくとも所属集団の中では適応が満たされるなら、過剰適応をネガティブな心理傾向として単純に否定的な評価を下せないだろう。

本研究では、所属集団への適応という視点から、過剰適応と集団アイデンティティ(Tajfel, 1978)との関連を検討する。

過剰適応

石津・安保(2008)では、過剰適応は「自己抑制」「自己不全」から成る内的側面と、「他者配慮」「期待に沿う努力」「人から良く思われたい欲求」から成る外的側面の二側面で構成されている。石津・安保(2009)では、自己抑制や自己不全の結果、他者配慮や期待に沿う努力、人から良く思われたい欲求が生じる可能性が示唆された。しかし、内的側面が高くとも必ずしも外的側面が高くない場合もある(石津・安保, 2008)ことから、内的側面が外的側面を強く規定しているわけではないだろう。

過剰適応の外的側面については以下のような知見が得られている。まず、中学生を対象とした研究(石津・安保,

2010)では、養育者の温かな養育態度が他者配慮、期待に沿う努力、人から良く思われたい欲求を促進することが明らかにされた。そして、尾関・飯田・鈴木・中野(2009)では、大学生の部活動・サークル集団における過剰適応を検討する際に、環境要因として組織風土の影響を検討したところ、過剰適応の外的側面は、内的側面だけではなく組織風土の影響を受けても生じることが確認されるとともに、過剰適応の外的側面は、ある環境に適応するための方略である可能性が示唆された。現に、中学生においては、自己不全や自己抑制が他者配慮や人から良く思われたい欲求につながると、勉強面での適応や友人関係の適応が高まっていた(石津・安保, 2009)。過剰適応の外的側面にみられる行動は、学校場面で教師や他の生徒とうまくやっている、「良い子」の特徴を反映している(石津・安保, 2008)。このことから、過剰適応の外的側面は所属集団の他成員から評価される行動であることが推察される。また、過剰適応の外的側面は、「周囲に溶け込んでいる、周囲の人と楽しい時間を共有している、周りと助け合っている、リラックスできる」といった内容で構成される、学校での居心地の良さに正の影響を及ぼしていた(石津・安保, 2008)。もしも回答者自身が、学校生活の中で他の生徒から受け入れられていると感じることがなければ、学校での居心地の良さに高い点をつけるとは考えにくく、ある程度以上好ましいと他成員に評価されなければ仲間として受け入れられることもないだろう。この点からも、過剰適応の外的側面が他成員からの肯定的な評価や受容につながっていると考えられる。これらの知見をまとめると、自己の内面に問題を抱えていても、過剰適応の外的側面にみられるような行動をとることで、少なくとも集団での適応が高まることから、過剰適応の外的側面は一定の適応機能を有していると考えられる。

後に詳述するが、集団アイデンティティに関する先行研究では、他成員の承認が自尊心を高める効果をもって

おり(de Cremer & Tyler, 2005)、集団アイデンティティもまた特性自尊心を高める(Postmes & Branscombe, 2002)といった知見が得られている。これらの知見を踏まえた上で、過剰適応傾向を所属集団との関連という枠組みで見れば、過剰適応の内的側面が高い者、すなわち自己不全感を抱えている者や自己を抑制する傾向が強い者が、所属集団の中で適応するための努力を無理やりにも行うことで所属集団での集団内適応を実現し、長期的には所属集団を離れた場でも、所属集団での集団内適応によって獲得した自尊心を個人内の適応にも波及させようとするのかもしれない。

個人内の適応を測定する指標はさまざまだが、本研究では自尊心を取り上げる。自尊心は心理的適応や社会的な適応を促進する(Kernis, 1993)ことから、個人の適応状態を反映する指標ととらえられている。人は基本的な所属欲求を満たす必要があり(Baumeister & Leary, 1995)、自分に価値を見出してくれる人々の中に自分が存在していることを確認できると自尊心が保たれる(Leary & MacDonald, 2003)とするソシオメーター理論もあわせれば、集団に所属することが自尊心の維持と高揚にとって非常に重要であり、ひいては個人の適応の維持につながると考えることができる。

過剰適応の内的側面の高い者は、自己不全を抱えており、自己に対して自ら価値を見出すことができない可能性が高い。そのような彼らにとっては、所属集団の成員から価値ある存在として認められることが、自尊心の維持高揚に有効な方略の一つとしてあげられるだろう。

ソシオメーター理論に立脚すれば、集団に所属することがあらゆる人々の自尊心の維持高揚に重要な役割を果たすが、自尊心の規定因は集団所属に限らない。過剰適応の内的側面の高い者は、あらゆる方法で自尊心を高めて内的な不適応状態を脱しようとして試みると考えられる。その中で、彼らにとっては、過剰適応の内的側面が低い者よりも、所属集団の他成員に受け入れられ、所属集団ならびにその成員との心理的な紐帯を構築して自尊心を高めるということが、内的な不適応状態を脱する手段の一つとしてはるかに重要性を帯びたものとして位置づけられている可能性がある。現に、先行研究では、過剰適応者は他者の承認を得ることで本当は低い心理的適応感を補償している可能性が示唆されている(益子, 2008)。そこで、本研究では、過剰適応と集団アイデンティティ、自尊心との関連について、次のように考えて検討する。

集団アイデンティティと過剰適応、自尊心

集団アイデンティティは、「自分がある社会集団に所属している」という個人の認知とその集団の成員であることにともなう価値や情緒的意味をさし(Tajfel, 1978)、自尊心の維持や高揚をもたらす(Hogg & Abrams, 1990)。そ

れゆえ、過剰適応の内的側面の高い者は、自己の不完全さを補うために集団アイデンティティを強化しようとする可能性がある。

集団アイデンティティは他成員との相互作用によって強化される(Geartner, Iuzzini, Witt, & Orina, 2006)が、他成員との相互作用は所属集団の中で居場所を確保する手段であり、相互作用の中で他成員から肯定的に評価されなければ、集団の中に自らの位置を確保することは難しい(Spears, Ellemers, Doosje, & Branscombe, 2006)。過剰適応傾向の内的側面の高い者が集団アイデンティティに拠って自尊心を高めようとする(Postmes & Branscombe, 2002)とき、他成員との相互作用の中で、過度な他者配慮や期待に沿う努力を行うことで、他成員から受け入れられることに注意を注いだりする可能性がある。このような方法で、他成員から肯定的な評価を得て、集団との心理的なつながりを強化する(Erez, Sleebos, Mikulincer, van Ijzendoorn, Ellemers, & Kroonenberg, 2009)、すなわち集団アイデンティティを高めると考えられる。こうして獲得した集団アイデンティティに拠る自尊心を通じてまずは集団内での適応を果たし、その自尊心が所属集団を離れても個人内の適応に波及されると考えられよう。それゆえ、過剰適応の外的側面は集団アイデンティティに正の影響を及ぼすことが予想され、さらに先述のように過剰適応の内的側面は、それが低い者よりも、集団アイデンティティを強化し、自尊心を高めるプロセスが顕著に認められると考えられる。

過剰適応の内的側面の低い者でも、集団の一員としての承認や、他成員との良好な関係構築を目的として他者配慮や期待に沿う努力などを行うだろう。このようにして他成員との良好な関係を構築できれば、彼らの集団アイデンティティが高まることは予想に難くない。ただし、過剰適応の内的側面の高い者と比べれば、内的側面の低い者における、集団アイデンティティが自尊心に及ぼす影響は弱いと考えられる。それは、過剰適応の内的側面の低い者は、個人内の適応を集団アイデンティティの自尊心維持高揚機能によって補償する必要性が、過剰適応の内的側面の高い者に比べれば薄いことが予想されるためである。そして、過剰適応の内的側面の低い者にとっては、他者配慮や期待に沿う努力は他成員とうまくやっていくために必要なものであるというだけで、集団アイデンティティを獲得する上で、他成員からの評価や承認を得るための行動は、過剰適応の内的側面の高い者に比べれば、それほど重要な意味を持たない可能性がある。したがって、過剰適応の内的側面の低い者は、過剰適応の内的側面の高い者と比較した場合、過剰適応の外的側面が集団アイデンティティに及ぼす影響とそこから先に自尊心に至る影響は弱いと考えられる。

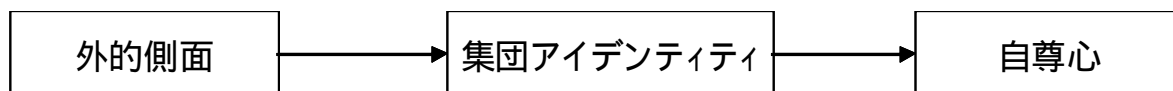


Figure 1 本研究の仮説モデル

以上の議論をもとに、本研究では Figure 1 に示す仮説モデルについて、過剰適応傾向の内的側面の高い者と低い者との間で、過剰適応の外的側面が集団アイデンティティに及ぼす影響や、集団アイデンティティが自尊心に及ぼす影響の強さを比較する。具体的には、以下の仮説を検討する。

仮説1 過剰適応の外的側面は、集団アイデンティティを促進し、集団アイデンティティは自尊心を促進する。

仮説2 過剰適応の外的側面が集団アイデンティティに及ぼす影響と、集団アイデンティティが自尊心に及ぼす影響は、いずれも過剰適応の内的側面の高い者の方が、過剰適応の内的側面の低い者よりも強い。

方法

2008年11月と、2009年5月に、A県内の大学生および短大生を対象に質問紙調査を実施し、回答に不備のない345名(男性158名、女性180名、不明7名)の回答を分析に用いた。

過剰適応 石津・安保(2008)による過剰適応傾向尺度を用いた。「以下のことがらは、あなた自身にどのくらいあてはまりますか。例にならって、あてはまるものにをつけてください。」という教示のもと、「1あてはまらない」-「5あてはまる」の5段階で評定した。

集団アイデンティティ 尾関・吉田(2007)による集団アイデンティティ尺度(12項目)を用いて、所属学科に対する集団アイデンティティを測定した。回答者は、「あなたが所属する学科について普段どのように感じているか、あなたの学科への関わり方をお尋ねします。以下の文について、あなた自身にもっともあてはまるものにをつけてください。」という教示のもと、「1あてはまらない」-「5あてはまる」の5段階で評定した。

自尊心 山本・松井・山成(1982)の訳による、Rosenberg(1965)の特性自尊心尺度(10項目)を用いた。

結果

過剰適応傾向尺度について、因子分析(主因子解, promax 回転)を行い、固有値の減衰状況(7.23 4.23 2.47 1.74 1.41 1.08 0.98)と解釈可能

性から5因子解を採用し、各因子の信頼性係数を算出した(Table 1)。内的側面に相当するのは、第1因子の自己抑制($\alpha = .88$)、第3因子の自己不全($\alpha = .81$)の2因子とした。外的側面は、第2因子の人からよく思われたい欲求($\alpha = .87$)、第4因子の他者配慮($\alpha = .72$)、第5因子の期待に沿う努力($\alpha = .67$)の3因子で構成した。石津・安保(2008)では期待に沿う努力に含まれていた項目の一部が、人からよく思われたい欲求に含まれてはいたが、石津・安保(2008)とほぼ同様の5因子構造であった。

続いて、過剰適応の内的側面については自己抑制と自己不全の合計尺度得点を、外的側面については、人からよく思われたい欲求、他者配慮と期待に沿う努力の合計尺度得点をそれぞれ算出して分析に用いた。

本研究の分析対象となった回答をもとに集団アイデンティティ尺度と自尊心尺度の信頼性係数をそれぞれ算出したところ、集団アイデンティティ尺度は $\alpha = .80$ 、自尊心尺度は $\alpha = .82$ であった。集団アイデンティティ、自尊心についても合計尺度得点を算出して分析に用いた。なお、各変数間の相関を Table 2 に示した。

過剰適応の内的側面である、自己抑制と自己不全の合計点の平均($M = 45.62$)を基準に、回答者を高群(179名)・低群(166名)に分けた。内的側面低群の集団アイデンティティ、自尊心の平均点はそれぞれ、 $M = 38.33$ ($SD = 7.44$)、 $M = 34.81$ ($SD = 6.48$)、高群については順に、 $M = 35.35$ ($SD = 7.24$)、 $M = 29.53$ ($SD = 5.98$)であった。内的側面の高群と低群の間で、外的側面を従属変数とした t 検定を行ったところ、有意な差はみられなかった($t(343) = 0.25, ns$)。

続いて、Figure 1 に示された仮説モデルについて、多母集団同時分析によるパス解析を行った(Figure 2)。モデルの各適合度指標は $\chi^2(2) = 1.99, ns$, GFI = 1.00, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = 0.00 と、十分な値を示したため、この分析結果を採用した。

分析の結果、内的側面の高群、低群ともに、外的側面から集団アイデンティティへの有意な正の効果と(高群 $\beta = .33, p < .001$; 低群 $\beta = .23, p < .01$)、集

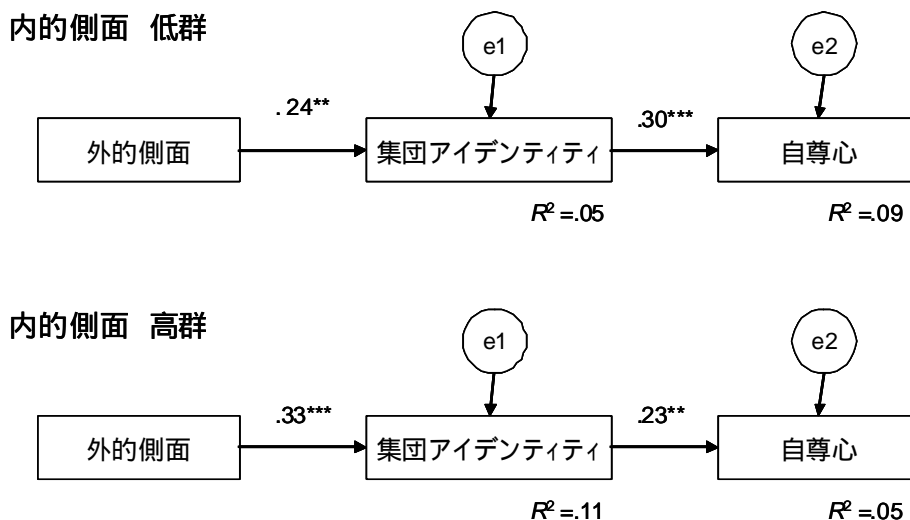
Table 1 過剰適応尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
自己抑制 ($\alpha = .88$)	.86	-.02	-.01	-.12	.08	.81
思っていることを口に出せない	.82	.10	.06	-.02	-.14	.77
心に思っていることを人に伝えない	.80	-.10	.03	-.07	.14	.77
自分自身が思っていることは、外に出さない	.76	.03	-.03	.24	-.13	.71
自分の気持ちをおさえてしまう方だ	.74	.01	-.06	-.13	-.01	.62
相手と違うことを思っている、それを相手に伝えない	.59	-.04	-.09	-.03	.11	.46
考えていることをすぐには言わない	.59	.02	-.03	.06	-.23	.45
自分の意見を通そうとしない	.46	.03	.06	.34	-.06	.58
人からよく思われたい欲求 ($\alpha = .88$)						
人から気に入られたいと思う	.02	.94	.01	.08	-.32	.79
自分をよく見せたいと思う	-.04	.81	-.01	-.16	.11	.73
人から認めてもらいたいと思う	-.06	.73	-.03	.06	-.02	.63
相手に嫌われないように行動する	.09	.63	-.03	.24	.03	.73
人から「能力が低い」と思われまいとがんばる	-.08	.52	-.06	.11	.22	.64
人からほめてもらえることを考えて行動する	.10	.50	.07	-.12	.34	.63
他人の顔色や様子が気になる方である	.11	.50	.01	-.00	.23	.57
自己不全 ($\alpha = .81$)						
自分には、あまりよいところがない気がする	-.03	-.09	.94	.07	-.05	.84
自分の評価はあまりよくないと思う	-.14	-.12	.73	.14	-.09	.58
自分には自信がない	.08	.13	.71	-.00	-.00	.70
自分らしさがないと思う	.13	-.05	.54	-.04	.04	.44
自分のあまりよくないところばかり気になる	-.04	.22	.52	-.14	.15	.52
自分は一人ぼっちと感ずることがある	-.05	.03	.50	.01	-.02	.36
他者配慮 ($\alpha = .72$)						
自分が少し困っても、相手のために何かしてあげることが多い	-.01	.02	-.06	.68	.01	.53
とにかく人の役に立ちたいと思う	-.13	.19	.12	.56	-.06	.51
「自分さえ我慢すればいい」と思うことが多い	.13	-.23	.19	.50	.29	.61
やりたくないことでも無理をしてやる人が多い	.10	-.01	.07	.46	.19	.52
人がしてほしいことは何かと考える	-.16	.22	-.07	.45	.21	.58
期待に沿う努力 ($\alpha = .67$)						
他者からの期待を敏感に感じている	-.18	-.02	-.11	.16	.71	.61
期待にこたえるために、成績をあげるように努力する	-.01	.07	.08	.12	.53	.54
人からの要求に敏感な方である	.11	.02	-.25	.23	.51	.61
期待にこたえないう、しかられそうで心配になる	.00	.10	.21	-.17	.50	.47
因子間相関	1.00					
	.13	1.00				
	.42	.19	1.00			
	.24	.37	.11	1.00		
	.35	.50	.28	.34	1.00	

Table 2 各変数の記述統計量と相関

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1 自己抑制	25.84	(6.41)						
2 人からよく思われたい欲求	27.02	(4.92)	.22 ***					
3 自己不全	19.78	(4.76)	.35 ***	.25 ***				
4 他者配慮	17.54	(3.53)	.27 **	.49 ***	.21 ***			
5 期待に沿う努力	12.36	(2.97)	.31 ***	.55 ***	.22 **	.51 ***		
6 自尊心	32.07	(6.75)	-.25 ***	.02	-.01	-.01	-.04	
7 集団アイデンティティ	36.78	(7.47)	-.13 *	.19 **	.17 **	.18 **	.18 ***	.32 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2 過剰適応、集団アイデンティティ、自尊心の関連

団アイデンティティから自尊心への有意な正の効果 (高群 $\beta = .23, p < .01$; 低群 $\beta = .30, p < .001$) がみられたが、両群の間にパス係数の有意差はみられなかった (外的側面 集団アイデンティティ $z = 0.72, ns$; 集団アイデンティティ 自尊心 $z = -0.73, ns$)。以上から、過剰適応の外的側面は集団アイデンティティを高め、自尊心につながるという結果が得られたが、この一連の流れは過剰適応の内的側面の高さにかかわらず一貫してみられることが示された。以上の結果から、仮説1は支持されたが、仮説2は支持されなかった。

考察

本研究では、過剰適応の内的側面の程度にかかわらず、外的側面が集団アイデンティティを高め、集団アイデンティティが自尊心に正の影響を及ぼすことが示された。そして、過剰適応の内的側面の高さによって、外的側面の生じやすさに差は生じないことが明らかになった。

本研究の結果および他成員との相互作用を通じて集団アイデンティティは高まる (Geartner et al., 2006) ことと、過剰適応の高い者は他者への配慮を行うが自ら他者に働きかけることは少ない (福光・河村, 2009) という先行研究の知見は矛盾しているようにも見えるが、以下のように考えることができる。

福光・河村 (2009) は、ソーシャルスキルは自己評価式の尺度であるため、過剰適応の高い者は、自己不全の感覚ゆえにソーシャルスキルを実際以上に低く評価している可能性がある点が見落とされていると述

べている。これは、過剰適応の高い者は、周囲の他者からみれば十分にできているようにみえる行動でさえも、自己不全ゆえに、「自分はこの行動については十分にできていない」と回答するかもしれないことを推測しての考察である可能性がある。

それを踏まえて、本研究の結果とあわせて考えると、次のように考えられる。所属集団の他成員との相互作用において、過剰適応の高い者は、自ら積極的に相手に働きかけることが少なかったとしても (福光・河村, 2009)、彼らの他者に対する配慮が、相互作用の相手によって、「他成員に対する配慮の行き届いた人」として肯定的な評価につながると、集団アイデンティティが高まる (Erez et al., 2009) のかもしれない。ただし、本研究では、他成員との相互作用の内容や相手の受けた印象までは測定していないので、推測の域を出ない。

本研究のように、過剰適応の外的側面を集団文脈において他成員との良好な関係を構築して集団アイデンティティを獲得するためのエージェントとして考えると、過剰適応は単なる臨床的な不適応ではなく、適応機能独自の性格を有するといえるかもしれない。過剰適応の外的側面は学校適応を支える一つの有効な方略と考えられている (石津・安保, 2009) が、大学生を対象にしても類似した結果が得られていることから、外的側面については社会文脈への適応を支えるものと考えてよいだろう。ただし、内的側面は抑うつ傾向を予測し (石津・安保, 2009)、特に自己不全は身体的ストレス反応や悲哀感情、攻撃的な感情を予測する (石津・安保, 2008) ので、自己抑制や自己不全の

高い者が他者の期待に応えることで社会文脈での適応を保っているとしても、個人の内的な適応状態が良好なわけではない。本研究では過剰適応の外的側面によって集団アイデンティティを獲得して自尊心を高めることが可能であることが明らかになったが、それによってすぐに内的に不適応な状態が改善されるとは限らない。したがって、所属集団に対して集団アイデンティティを獲得することで得られた集団内適応が個人にとっての適応全般には結びつくかは、縦断調査を行うなどして、より長期的な視点で考える必要があるだろう。

過剰適応の内的側面に起因する、外的側面の差はみられなかったことから、大学生の場合は、他者配慮や期待に沿う努力、人から良く思われたい欲求は、自己を抑制している結果として生じるわけではないことが示され、内的側面が外的側面を予測しやすい(石津・安保, 2009)という中学生における結果とは異なっていた。この点については、内的側面と外的側面の関係が発達に応じて変化していたせいなのか、明確に意識されやすい学級という単位と、全体を意識することが難しい学科という単位の性質の違いから生じているのかは、本研究の結果だけでは明言できない。

本研究の課題と展望

先行研究は、中学生を対象とした研究が中心であり、学校場面における過剰適応を測定するための尺度であったものの、本研究の対象となった大学や短大の場合は、中学校のような学級集団が存在しない場合もある。この尺度は特に学級集団を意識しなければ回答できない類のものではないが、所属集団とのかかわりから過剰適応を議論する際には、学科によっては集団としての学科を想定することが難しい場合もあることに留意する必要がある。したがって、大学生の場合は部活動やサークル集団、ゼミといった、より集団として明確に意識しやすい集団とのかかわりから検討したときに、同じ結果が再現されるとは限らない。

そして、本研究では、同じ学科の他成員との関係性や相互作用のあり方を直接測定してはいない。そのため、過剰適応の外的側面が集団アイデンティティを予測してはいるものの、その間のプロセスに対する検討が十分とはいえない。したがって、今後は所属集団内での行動や他成員との関係性を問う項目もあわせて検討する必要があるだろう。

本研究と石津・安保(2008; 2009)は学生を対象としたものであったが、社会人を対象とした過剰適応尺度も開発されている(水澤・中澤, 2010)。水澤・中澤(2010)では、従来の研究とは異なり、自己への過信という側面も新たに加え、「課題遂行に関するポジティ

ブな認知」、「過大な評価希求」、「援助要請への気後れ」、「人間関係に関するポジティブな認知」、「不安定な自尊感情」、「過大に対する完全癖」、「他者迎合のための自己抑制」の7因子で過剰適応を構成し、過剰適応を過信と現実能力の差異からとらえようとしている。このような、自己を過信していながらも現実の能力が伴っていないという意味での過剰適応と、従来の研究における過剰適応との共通点と相違点を明らかにするとともに、集団アイデンティティとどのような関連があるのかについて、従来の研究や本研究の枠組みで得られた結果と比較することも今後の研究では考えていく必要があるのかもしれない。

引用文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachment as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, *117*, 497-529.
- De Cremer, D., & Tyler, T. R. (2005). Am I respected or not? : inclusion and reoutation as issues in group membership. *Social Justice Research*, *18*, 121-153.
- Erez, A., Sleebos, E., Mikulincer, M., van Ijzendoorn, M. H., Ellemers, N., & Kroonenberg, P. M. (2009). Attachment anxiety, intra-group (dis)respect, actual efforts, and group donation. *European Journal of Social Psychology*, *39*, 734-746.
- 福光奈緒子・河村茂雄 (2009). 女子中学生における過剰適応とソーシャルスキルとの関連 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 205.
- Geartner, L., Iuzzini, J., Witt, M. G., & Orina, M. M. (2006). Us without them: Evidence for an intragroup origin of positive in-group regard. *Journal of Personality and Social Psychology*, *90*, 426-439.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1990). Social motivation, self-esteem and social identity. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.), *Social Identity Theory: Constructive and critical advances*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. pp.28-47.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応の与える影響 教育心理学研究, *56*, 23-31.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究 個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から 教育心理学研究, *57*, 442-453.
- Kernis, M. H. (1993). The role of stability and level of self-esteem in psychological functioning. In Baumeister, R. F. (Ed.), *Self-Esteem: The Puzzle of Low Self-regard*. Plenum Press.
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する一考察 欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要, *49*, 491-493.

- Leary, M. R., & MacDonald, G. (2003). Individual differences in self-esteem: A review and theoretical integration. In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity*. New York: Guilford. pp.401-418.
- 益子洋人 (2008). 青年期の過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承認欲求との関連 カウンセリング研究, **41**, 23-31.
- 水澤慶緒里・中澤 清 (2010). 成人期の過剰適応尺度の作成 社会人を対象とした項目の収集、精選と信頼性の検討 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, 129.
- 尾関美喜・飯田典子・鈴木香織・中野ちあき (2009). 大学生の部活動・サークル集団における組織風土と過剰適応傾向との関連 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 43.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知 組織風土・集団アイデンティティによる検討 実験社会心理学研究, **47**, 26-38.
- Postmes, T., & Branscombe, N. R. (2002). Influence of long-term racial environmental composition on subjective well-being in African Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 735-751.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-image*. Princeton University Press.
- Spears, R., Ellemers, N., Doosje, B., & Branscombe, N. R. (2006). The individual within the group: respect. In Postmes, T. & Jetten, J. (Eds.), *Individuality and the group: Advances in social identity*. London: Sage. pp.175-195.
- Tajfel, H. (1978). Social categorization, social identity and social comparison. In Tajfel, H. (Ed.), *Differentiation Between Social Groups*. London: Academic Press. pp.61-76.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Relationship between over-adaptation and group identity

Miki OZEKI (*Research Center for Higher Education, Kanazawa University*)

Over-adaptation represents a tendency to always meet the demands or expectations of others. It involves both internal and external aspects. The former includes self-inhibition and self-inadequacy, and the latter includes consideration for others, effort to meet expectations, and desire for appreciation. The present study examined whether the internal aspects of over-adaptation caused the difference in the influence of (1) the external aspects on group identity and (2) group identity on self-esteem. A total of 345 university and junior college students were the target of analysis. Simultaneous path analysis of several groups showed that regardless of the internal aspects, the external aspects affected self-esteem mediating group identity. However, there was no significant difference among paths.

Keywords: group identity, over-adaptation, self-esteem.